

平成27年度岩手県環境保健研究センター研究評価委員会の評価結果

1 会議の名称

平成27年度岩手県環境保健研究センター研究評価委員会

2 目的

効果的・効率的な試験研究の推進を図るため、「岩手県試験研究評価ガイドライン」及び「岩手県環境保健研究センター機関評価及び研究評価実施要領」に基づき、外部の専門家・有識者等で構成する研究評価委員会による外部評価結果を踏まえ、研究計画の変更や見直し等に活用するものです。

3 開催日時

平成28年2月22日（月）10：00～11：30

4 開催場所

岩手県環境保健研究センター 1階研修室

5 評価対象研究課題

	研究課題	評価区分	研究期間
1	イヌワシの生息数維持に向けた保全生態学的研究	事前評価	28-32

6 評価委員

研究評価委員名簿

役職	氏名	所属・職名
委員長	藤井 克己	公益財団法人いわて産業振興センター 顧問兼連携推進センター長
委員	石川 奈緒	岩手大学工学部 助教
	小浜 恵子	地方独立行政法人岩手県工業技術センター 理事兼連携推進監
	坂田 清美	岩手医科大学医学部 教授
	渋谷 晃太郎	岩手県立大学総合政策学部 教授
	田端 雅進	森林総合研究所東北支所 産学官連携推進調整監

※ 五十音順、敬称略

評価方法

評価委員には、事前に研究課題説明資料を送付し、評価委員会は研究課題の担当職員によるプレゼンテーションの後に質疑等を実施する形式で進め、後日委員に評価調書を御提出いただきました。

研究課題の資料は、研究課題説明資料と委員からの評価調書を取りまとめたもので、評価委員の総合評価基準と評価結果に対するセンターの対応方針の基準は下記のとおりとなっています。

記

1 総合評価の基準

評価委員には研究課題について、次のA～D評価基準による総合評価していただき、あわせて自由記載で記述評価をいただいております。

	A	B	C	D
【事前評価】 (新規課題に対して実施)	重要な課題であり、優先的に取り組む必要がある。	有用な課題であり、早期に取り組む必要がある。	解決すべき問題等があり、今後の検討を必要とする。	-
【中間評価】 (継続課題に対して実施)	順調に進行しており問題なし。	ほぼ順調であるが一部改善の余地がある。	研究手法等を変更する必要がある。	研究を中止すべきである。
【事後評価】 (終了課題に対して実施)	研究の成果は目的を十分達成した。	研究の成果はほぼ目標を達成した。	研究の成果は目標を達成できなかった。	研究の成果は目標を大きく下回った。

※平成27年度は、中間評価及び事後評価の対象となる研究課題はありませんでした。

2 評価結果に対するセンターの対応方針

評価委員からの総合評価及び記述評価等のセンターの対応方針は、次のとおりです。

	1	2	3	4
【事前評価】	研究計画のとおり実施	一部見直しの上実施	今後再検討	実施しない
【中間評価】	研究計画のとおり実施	一部見直しの上実施	計画再考	中止
【事後評価】	完了	継続延期	新規課題化	-

※平成27年度は、中間評価及び事後評価の対象となる研究課題はありませんでした。

資料1

研究課題	1 イヌワシの生息数維持に向けた保全生態学的研究 (28-32)
研究目的・背景	<p>イヌワシの生息数が全国最多の岩手県では、2015年までにこのべ34つがいが確認されているが、近年つがいの消失が疑われる営巣地が増加し、確実な生息数は28つがい程と推定される。減少傾向が表れてきた背景には、長年に及ぶ繁殖成功率の低下があるとみられ、個体群を維持するために巣立ち幼鳥の増加を図っていく必要がある。</p> <p>岩手県内のイヌワシの生息状況や生態的特性については、これまでの研究によって解明が進められてきた側面も多い一方、繁殖失敗の機構、移動分散の特性、遺伝的構造、新たなつがいの定着など、個体群の動向を把握するうえで重要な項目には、未だ不明、不十分な部分が少なくない。本研究では、前回の研究課題で着手、開発した調査手法を応用して上記の解明に取り組むとともに、基礎データとして重要な繁殖状況の詳細なモニタリングを継続する。また、個々のつがいの繁殖成績について、生息環境や地理的特性の側面から分析を行なう。</p>
研究内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ 繁殖状況モニタリング (28～32) ・ ビデオカメラを用いた繁殖行動解析 (28～32年) ・ 個体識別による移動分散調査 (28～32年) ・ 遺伝子サンプルの収集とDNA解析 (28～32年) ・ 地理情報を用いたつがいの繁殖成績の解析 (30～32年)
評価結果	<p>○ 総合評価 A(3人)・B(3人)・C(人)・D(人)</p> <p>○ 総合意見</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ イヌワシの生息維持に対して重要であり、かつ緊急性の高い研究課題である。 ・ 保護の重要性は理解。環境センターとして長期にどこまで取り組むべきか要検討。 ・ 本研究は、絶滅が危惧されるイヌワシの保全に向けた生態学的な研究であり、貴重な研究である。 ・ 今後も様々な開発が計画されていることからイヌワシの保護対策は緊急性が高いと思われる。具体的な保護対策につながる研究成果が期待される。 ・ イヌワシの生息数維持に向けた保全生態学的研究は緊急・重要性が非常に高く、総合的な評価はA評価と考える。 ・ 既往の3期14年間の研究実績により、解明された点、未解明の点の整理が不十分であり、ルーティン的に研究が取り組まれている印象を受ける。基礎的継続的な研究実績のある繁殖状況調査・解析に注力して成果を取りまとめ、新規部分については、別途、外部資金申請に当てるなど、内容の切り分けが必要ではないか。
センターの対応方針	<p>①研究計画のとおり実施 ②一部見直しの上実施 ③今後再検討 ④実施しない</p> <p>(コメント)</p> <p>保護対策の策定に資する知見の収集・解析に努めるとともに、外部資金獲得も含め、外部機関等との連携をさらに拡大し、研究を進める。</p>